



5月に札幌市で行われた北海道チューバ・ユーフォニアムキャンプでも講師をつとめた。

本が音楽的な部分に密接に結びついていることを説明しつつ、生徒に一つ一つのフレーズを丁寧に演奏して、しかも大胆に表現させる。緊張して平板になりがちな受講生の演奏をぐいぐいと引っ張り、立体的なものにしていく様は見事だった。

4時間に渡るレッスンの後にリサイタルが行われた。曲はシューマンの《アダージョとアレグロ》、ウイリアム・クラフトの《ENCOUNTERS III》、アンソニー・プロダの《3つのミニチュア》、ヤコフ・ガーデの《JALUSIE》、ジャンラの《Cate

1930》、アンコールにモンティの《チャルダッシュ》。スタンドを使ってはいしたが、全曲立って暗譜で演奏したのにはビックリ。こんなところにも彼の演奏に対する真摯な姿勢が現れている。圧倒的な音域を駆使し、楽器を感じさせない伸び

伸びとした自由な表現で聴く人を魅了した。彼ほどの名声を得ていながら、今でもずっと自分を磨き続けているその姿に、「オマエは何をやっているんだ」と尻を蹴飛ばされたような気がして、思わず体が引き締まった一日だった。

「二日に二音を磨けば2ヶ月で4オクターブを制覇できる」

イエンス・ビヨルン・ラーセン

文・佐藤 潔(東京都交響楽団チューバ奏者) 取材協力・管楽器専門店タケ



デンマークの世界的チューバ奏者、イエンス・ビヨルン・ラーセンが来日し、5月6日に東京・新大久保の管楽器専門店タケ下のスペースDで公開レッスンとリサイタルを行った。ラーセンはデンマーク国立放送響の首席チューバを務め、1991年にジュネーブ国際コンクールで初めて開催されたチューバ部門に優勝し、世界にその名が知れ渡った。過去に東京でリサイタルを開いたほか、京都市交響楽団とヴォーン・ウィリアムズのチューバ協奏曲を協演している。筆者も世界チューバ協会のカンファレンスで何度も接したその感動的な演奏を、鮮烈に記憶している。氏は2002年からハノーファー国立音大の教授として後進の指導とソロ活動に専念している。

今回レッスンを受けたのは音大生4名。その内容は、氏の豊富なアイデアと経験が如実に伺えるとても興味深いものだった。まず、受講生がチューニングでピアノのF単音に合わせようとしていると、ピアノストにB♭マイナーの和音を弾かせて「単音で合わせるよりも短調の和音の第5音を吹いた方が自分の音程が分かりやすい」とアドバイスをした。

レッスンはそれぞれの受講生ごとに、演奏の基礎的な部分と音楽的表現に踏み込んだ部分との二つの視点から進められた。基礎的な部分では、基本中の基本、ブレスについて「たっぷり吸ってたっぷり使うこと」を、体を大きく動かしながら受講生に見せて理解させ、それを唇の振動に結びつける練習を繰り返すことの重要性を説いた。その中の一つのポイントとなる、「唇が振動する瞬間を捕まえる」練習はとても興味深いものだった。

楽器にマウスピースから空気を送り込み、まずは空気音が鳴り始める、ほとんど聞こえない唇の振動が少しずつ始まる瞬間を感じて体に覚えさせる練習である。これを様々な音域で繰り返し練習すると、ピアノストからフォルテンストまでスムーズに唇が振動するようになる。もちろんダイナミックレンジも拡がり、それだけ自分の思った通りの音色も作りやすくなる。「そのためにも基礎的な練習の繰り返しが必要だ」と強調した。

高い音域では、あえて長い管を使って練習してからオリジナルの管の長さに戻して音色を整えたり、低音域では、「シフト」と呼ばれる、片方の唇だけに重心を置いて振動のさせ方を練習させるなど、アイデア満載のアドバイスが続く。彼は、低音域で下唇中心に振動させると大音量が出やすくなるというが、シ



受講者と曲目：池田正太(洗足学園音大) John Williams : Concerto for Bass Tuba 第1楽章、山形一隆(昭和音大) F. Strauss : Concerto for Horn、林裕人(東京芸大) Vincent Persichetti : Serenade No.12、古川信哉(尚美ミュージックカレッジ・ディプロマ科) Jan Keetsier : Concertino